

あゝ見よかしの森かげを
罪人のせし黒き馬車
町の方にぞいそぎ行く

煙

松 寺 久 雄

こゝかしこ鶏なきて
をちこちに小鳥こゑして
世の塵を清くはなれし
曉の山かげの村

たちこびるもやのうちより
ゆくらく大空たかく
のぼりゆく朝けの煙
見るだにもこゝろ樂しき
遠方の高嶺は暮れて
夕鳥こゑにぎはしく
こゝの畦かしこの畔ゆ
村人のかへりゆく方

木がくれのこゝにかしこに
そらたかくなびきあひつゝ
たちのぼる夕けの煙
見るだにもこゝろ樂しき

つらき世のかぜにふかれず
都邊の風になびかず
朝夕たなびく煙
見るだにもたのしきはれ其煙

旅の空

ふるさと忘れ今ははた
雁が音きゝてをどり立ち
あゝこひしなれし故郷

うきこと繁き旅の空
ははこ草の名慕はれぬ
かすみこめたる山かげの
戀しき家兄いまいかに
花のにはひに胸をどり
月のひかりに涙おつ

あゝなつかし遠^{とほ}ちの山かけ

四とせの月日なつかしく み空の星をながめては

指をりわがせ數ふらん 門べに我妹^{いも}子ながむらん

いや長さこんとしつき

花のあけぼの月のかげ まなびの窓^{まど}のいそしみを

はやくも卒^{そと}てとくとくと 飛びても行かん里の家

はや行かんかのみ空

瀧

東くめ子

はとばしるみなわに袖はぬるゝとも

よりにながめん瀧のしら糸

天の原仰けは高し雲間より

みなぎりおつる峯の瀧津瀬

亡友をおもひて

同人

夢のうちになし歌聲ありしごと

うつくしかりき今はなき友の

我伯母上

しのぶくさ

我母方のをば上は、母上よりは妹にたはしまして、御歳は、四十の上に二ツ三ツ出て、給ひぬれど、ほどよりはいと若やきてなん見え給へりし。そは御子もち給はぬ故にやと思はる、我ははらから多くして、幼き頃より伯母上の許にて、人となりぬるに朝夕、誠の母にもまして、まめやかに我を愛し給へり。我くに出でん時にも、返すくも諭し給ひけるやう、衣服調度は更にも云はず女のたしなみは、かくあるべきものぞ、故郷の空をのみ、徒らになつかしむなよ、一度出でたらんからには、歸着でやは立歸るべきなと、こまくとしひき、かくて年毎の休みには、うからやからの顔見るとを樂しみつゝ、歸着しぬ、そのほとは照る日かしく、夏の盛も、春風の和らかなるが如き、心ちするまとおに、長き月日の過ぎ行くをも、知らずなん、別けて去年の歸着には伯母上も健かにて、迎へ給ひ、我もうれしく、冷々しき夜のそゝるありきなどには、いつもく伴はれき。

さる程に、八月の半、姉上の御いたつき、重くおはする。し告げ來ぬ、驚きて姉上が行きて、夜盡心を盡してみとり參らせたりその間十數日が程伯母上にめがれけるを、伯母上は姉上の御病、いかにくと打案し給ひ、飲食廢臥も安からず在しきとぞ、かくて珍らしきものなど、調しては、みどりせる我らにさへ、數里へたゝれる處より、送り給へり、さしも重かりし姉上の御心ち稍々怠り給ぬれば、また伯母上の許にかへり行きて、かたみに喜ひあ